秋空は澄んでいるのに

ぱんだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋空は澄んでいるのに

【Ｎコード】
Ｎ００２５Ｚ

【作者名】
ぱんだ

【あらすじ】
彼女は旅に出た。
発端は一眼レフカメラ。
思い出を作る為。
思い出を切り取る為に。

（ブログ掲載作品）

一回

私、旭八千代（アサヒヤチヨ）は旅に出た。
旅とか言うと格好良いけれど、只の旅行。
発端はカメラ。

夏の太陽が輝いていたあの日。
ウィンドウショッピングをぶちかましていたあの日。
そんな時。
古いカメラ屋の前を通り過ぎた。
通り過ぎたんだけれ。
とある何かが気になって戻った。
閉店セールと書かれた小さなカメラ屋のショーウィンド。
小さな一眼レフカメラが目に入ってしまった。
とても綺麗で。
何故か惹かれた。
私はカメラになんて興味なかった。
携帯電話で十分。
てゆーか、機械音痴な私に文明の利器であるカメラなんて扱える訳がない。
携帯電話のカメラですらボケる。
友達には奇跡だと笑らわれる。
何で勝手にピントを合わせてくれるカメラのピントがずれるのかも分からないけれど。
何故かボケる。
たまに撮れても酷い写真ばっかり。
そんな私がそのカメラを欲しいと思ってしまった。
思ってしまったから店に入った。
カランコロンとレトロな音がした。

なんかいいな。
こういう古いお店がなくなっちゃうのはさびしいな。
なんて。
よくも知らないお店の事思ったり。
店内は古いカメラがずらりと並んでいた。

「いらっしゃいませ」

カウンター越しにおじさんが私に声を掛けてきた。
店主かな？

「あ、あの」
「何かお探しで？」
「その。えーと。窓の所の小さい奴が…」
「うーん？ああ。ほいほい。ちょっと待ってて」
「はい」

店主はカウンターから出てきてショーウィンドーに飾られた猫の人形を手に取った。

「これかな？」

ちげーよ。

「いえ。あの…」
「ほっほっほ。冗談冗談」
「あ。あははは」

冗談きついよ。
店主は茶色い皮の貼られた小さな一眼レフカメラを手に取った。

「これかなお嬢さん」
「はい！」
「お目が高いね。これはあんまり人気ないよ」
「…」

人気無いんだ。
じゃあ、お目が高くないじゃん！

「でもね。良いカメラだよ。とっても良いカメラだ。お嬢さんの思い出になるよ」
「えっと」
「さあ、どうぞ」

そう言って私に小さなカメラを渡した。
小さいのに重くて。
それでなんか。
何て言っていいのか分からないけれど。

「これ。ほしいです」
「そーかい。そーかい。よく見ないで良いのかい？一応ちゃんと整備したつもりだけどさ」
「ん？」
「古いカメラだからね。買う時はよく見るものさ」
「あ。そーなんですか？ごめんなさい。私カメラ買うの初めてで」
「うーん。じゃあ。そのカメラは難しいかもね」
「難しいんですか？」
「一応絞り優先はできるけど。レンズはマニュアルだからね」
「えーっと」
「それと。分かってると思うけど。これ銀塩だからね」

「銀塩？」
銀鮭塩焼きって事？
私鮭好き。

「フィルムだよ」
「フィルム！」
「ほっほっほ」
「どーしよ。でもこれ。何かな…」
「良いんじゃないかい？気に入ったのなら。楽しいよ」
「楽しいですか」
「そうだよ。楽しいよ」

そう言って色々教えてくれた。
フィルムの入れ方。
変なボタン説明。
ピントの合わせ方。
露出？
何かよく分かんないけど。
すっごい楽しかった。
とっても楽しかった。

「どーするかい？買うかい？」
「はい！買います」
「じゃあ…

がはっ！
なんつー値段！
そーなの？
カメラってそんな高いの？

無理無理。
無理無理無理無理。
ちょっとちびるところだった。
てゆーか、若干ちびったかも。
…
大丈夫！
ちびってない。
あーよかった。
あはははは。
貯めよう。
そうだ、貯金だ！
貯金魚！

「あの…」
「なんだい」
「買えませんです」
「そーかいそーかい。それは残念だね」
「はい。とっても残念です。ごめんなさい。買えもしないのに時間とらせちゃって」
「いや。いいさ。楽しかったよ」
「…」

私はふと思いついた。

「そーだ！このカメラに合うフィルムください！」
「なんでだい？」
「このカメラ買うためにお金貯めます。だからフィルムだけでも買っておけば目標になるかなってゆーか。なんとゆーか」
「ほっほっほ。そいつはいい考えだお嬢さん。ほれ。そこのワゴン」
「これ？」

「そーだよ。そのワゴンの中ならどれでも大丈夫だ。全部二百円均一だ」
「ほんとですか！」
私はワゴンの中から適当に。
ほんと適当に選んだ。

「これにします！」
「おっと？それはリバーサルだな。こんなの入れてあったっけ？まぁいいか。現像割高だよ。いいのかい？」
「割高…」

カメラ屋さんが割高って。
超えるのか。
千の位は余裕で超えるのか！
まさか万の位まで。
あり得る。
ちょっと震えてきた。
いやいや。
これは武者震いだ。
あれ？
ちびった？
…
大丈夫！
まだちびってない。

「何おびえてるんだい。千円しないよ」
「へ？そーなんですか！」
「そーなんですよ。じゃあ、これで良いかい？お嬢さん」
「はい！」

「良い返事だな。んじゃサービスするしかないね」

そう言っておじさんはフィルムを小さな紙袋に入れてくれた。
カウンターの下から少し大きな袋を取り出す。
そこにフィルムを入れてくれた。
でか過ぎじゃね？袋。
更に。
カメラを丁寧に包む。
丁寧に包まれたカメラは、その大きな袋へと入れられた。

「サービスだ」
「おじさん！」
「おいおい。僕はお爺さんだよ」

そこかい！

「お、お爺さんダメですよ。そんな高価なもの」
「何だ要らないのかい？じゃあいいけど」
「欲しいです！」
「じゃあ持っていきなさい。閉店サービスだよ」
「あ…。ありがとうございます！」
「良い返事だね」

そう言ってお爺さんは笑った。
とっても楽しそうに。
私は何度もお礼を言った。
お爺さんは何度も笑った。
楽しかった。
帰り際。

「写真撮ったら現像に持ってきます！」
「いや。持って来てもな」
「ん？」
「今日でお店終わりだからね」
「嘘！」
「いやいや。本当さ。閉店セール」
「あ…。閉店セール」
「そーゆー事さ。今日で僕のバイトも終了だ」

バイトだったんかい！
じじいコノヤロー！
大好きだコンチキショー！
だから。
だから私は何度もお礼を言った。
お爺さんはやっぱり笑っていた。
最後にお爺さんは言った。

「写真は時間も場所も切り取れる、思い出製造機械だ。いっぱい思い出作りなさい」

そして笑った。

二回

そんなこんなでカメラを手に入れた。
私は家に帰って弄り倒した。
可愛過ぎる。
何この機械。
ありがとうお爺さん！
こいつめー。
愛いやつめー。
あひゃひゃひゃ。
私はファインダーを覗いた。
私の部屋の一部分だけが映し出されている。

「切り取る…」

呟いた。
お爺さんの言葉を思い出した。
お爺さんは思い出と言っていた。
思い出。
そうだ！
旅だ！
安易な考えだった。
思い出と言えば旅行。
一人旅とかかっこよくね？
なんて思った。
だから。
だから私は旅行に行く事にした。
一泊二日。
観光地。

一杯考えて、一杯調べた。
考えてる時に楽しすぎて涎が垂れたのは内緒。
そんな涎を垂れ流してる時だった。
大変な事実が私を襲った。
先立つものが無い事に気が付いたなう。
で。
夏中バイト三昧。
旅費を稼いだ。
かー。
いい汗かいたぜ。
もちろん家では一眼レフを愛でた。
無駄にファインダーを覗いた。
私は見事夏の間に旅費を稼ぐことに成功した。
旅行先も決めた。
泊まる場所も決めた。
もちろん予約も取った。
新幹線の切符も買った。
カメラよし！
フィルムよし！
思い出作りの準備は整った。
いざ秋空の中、思い出作りの旅へ。

『秋空は澄んでいるのに』

そして私は今新幹線揺られている。
新幹線ってあんまり揺れないけど。
とりあえずは駅弁タイム。
やっぱり旅行と言ったら駅弁。

何だこれ！
美味し過ぎる！
新幹線で駅弁って美味し過ぎる！
駅弁タイムを終えて少し仮眠。
アナウンスで目的の駅の名が告げられる。
新幹線はホームへと滑り込む。
ここからは地下鉄。
私は電車を乗り継ぎ宿泊地へと向かった。
すぐにでも観光したい気持ちを抑えてホテルへ。
チェックインを済ませて部屋に。
うーん狭い。
激安だったからしょうがない。
窓から街を見てみる。
おう！
和風な景色が広がっている。
景色は最高だよ！
来てよかったー！
おっと。
ここでこんな感動してちゃダメだった。
荷物を置いていざ観光へ！
と。
その前に。
ここにきて一大イベントの到来です。
リバーサルフィルム２４枚撮り。
このフィルムをカメラにセットするという！
ああ、もう。
手が震える。
カメラの裏蓋を開ける。
フイルムを少しだけ出してスプー…。
あれ？

何だっけ？
とりあえず装着。
裏蓋を閉めて、空シャッターを数回。
これで。
これで準備完了！
何だろう。
すっごい楽しい。
楽しすぎてちょっとちびりそうかも。
…
大丈夫！
観光行く前にトイレ行っとこ。
そんなこんなで。
カメラを首から下げて観光出発！
目的地は目星をつけていたからばっちし。
歩いて最初の目的地へと向かった。
やっぱり全く知らない道を歩くのってちょっと不安で。
すっごい楽しい。
おお！こんなところにこんなモノが、とか。
ん？この道行けば近道なのかな、とか。
色んな発見があった。
そして目的地発見。
お寺さん。
何だこれ！
でっかい門がある！
少しだけ紅葉したもみじが彩りを添える。
これを…。
これを撮ってみる！
そう私は思った。
そう決めた。
レンズカバーを外してファインダーを覗く。

もみじ。
門。
猫。
…。
猫？
門の前に一匹の黒猫が座っていた。
おっと。
これはこれでナイスですな。
雰囲気出てますよ黒猫さん。
黒猫さんはこちらを見つめている。
じーっと。
じゃあ、最初の思い出は黒猫さんで。
しっかりピントを合わせる。
大丈夫。
これで合ってるはず。
そんな私のゆっくりな行動でも黒猫さんは逃げなかった。
うおー！
震えるー！
何よこれ！
手がふーるーえーるー！
またしても武者震いが。
だから。
私は手に力を籠めた。
止まった。
今しかない！
私はシャッターを切った。
最初の一枚。
最初の思い出。
この空間。
今この時間。

カメラは思い出を切り取った。
私はカメラを下ろす。
ん？
あれ？
黒猫さん居なくなっちゃってる。
残念。
撫でくり回してやろうと思ったのに。
まぁいっか。
私はこのお寺さんの名所に行く事にした。
水道橋。
明治あたりに造られた古い水道橋が在るらしい。
で。
発見。
おお！
これはまた綺麗だー！
煉瓦造りの柱が連なってて。
アーチがまた素敵。
これは二枚目いっちゃいますか！
いっちゃいましょーか！
うへへへー。
涎が出るのを我慢した。
危ない危ない。
私の口って緩いのか？
さっそく私はファインダーを覗く。
ん？
黒猫さん？
煉瓦造りの柱に黒猫さんが寝ていた。
あらあら。
黒猫さんたらもー。
写りたがりや・さ・ん。

いいよ、いいよー。
二枚目の思い出も黒猫さんに決定。
あ、でも。
この位置からの写真じゃ紅葉が映らない。
だから私はちょっと場所を移動することにした。
カメラを下ろす。
居ない。
黒猫さんが居なくなった。
あー、逃げちゃったかー。
残念だけど、しょうがないか。
私は少しだけ移動して再度ファインダーを覗いた。
黒猫さん。
何で居ないの！
瞬間移動？
ヤードラット星にでも行ってきたの？
黒猫さん！
カメラから目を外す。
あれ？
何で居ないの！
やっぱり瞬間移動？
はー。
初めての旅行だから疲れてんのかな、私。
またファインダーを覗く。
だーかーらー！

「何で居ないのよ！」

つい叫んでしまった。
おっきな声で。
痛い視線を感じるけど無視。

こんな時は無視。
それより。

「貴方は…」
「俺かい？黒猫だろ。どー見ても」
「いや。まー。そーだけど」
「他に質問は？」
「あの…」

ん？
誰と話してんの、私。
ファインダーから映される黒猫が少し笑った様に見えた。

三回

私はその場から逃げる様に走った。
ダッシュ。
相当の速さだったと思う。
今なら新幹線使わなくても帰れるんじゃないかってくらい。
比喩だけど。
とりあえず人気の無い場所を探した。
木々に囲まれたベンチを見つけてそこに座る。
何だろ。
何だったんだろ。
私の目は奇怪しくなっちゃったのかな。

「はぁ」

溜息をついてみた。
色んな思いの溜息。
でも。
確かめないと。
私はカメラを構える。
やっぱり居る。

「黒猫さん」
「何だよ」
「何で居んのよ！てゆーか何でしゃべってんの！」
「おいおい。そんな大声出すなよ」
「何でよ！」
「一人で叫んでる女とか色々痛いだろ」

は！
確かに！
他人に聞かれたら変態さんだ！
私は声のトーンを落とす。

「あの…」
「何だい？」
「何で居るの？」
「さあ？分かんない」
「分かんないって」
「分かんないもんは分かんないよ。幽霊とかそーいった類だろ」
「幽霊！」

こわっ！
怖いじゃん、それ。

「何で私のカメラに…」
「さあ？」
「あれ？でも今までファインダーは何回も覗いたけど写ってなかったよ」
「さあ？」
「さあばっかり」
「悪かったな」
「悪くは無いけどさ。なんで旅行に来たらこんな事に」
「なんか祟られる事でもしたんじゃないのか？」
「してないよ。て、私祟られちゃったの？」
「幽霊と言ったら祟るだろ」
「祟ったの？」
「いや。そんな気はしないけど」
「違うんじゃん。ちょっとびびったよ」

ちびるところだった。
…。
大丈夫！
ホテルでちゃんとしてきたから。
今の私に死角なし！

「何で黒猫さん見える様になっちゃったんだろ」
「さあ？カメラ変に弄ったんじゃないのか」
「そんな事しないよ。今日だって初めてフィルム入れ…」

フィルム？
もしかして。

「黒猫さん」
「あん？」
「もしかしてフィルムかも」
「フィルム？」
「今日初めてフィルム入れたんだ。このカメラ」
「そーか。じゃあ。そーかもな」

不思議な感じだった。
幽霊って言われて。
本当は怖いはずなんだけど。
あんまり怖く無くて。
普通に話せて。
猫なのに。
なんか分かんないけど。
何なんだろーな。
とりあえず。

私はあらためて自己紹介した。

「私は八千代。貴方は？」

「さあ？」

「さあって。名前くらい有るでしょ」

「無いよ。知らない。幽霊が自己紹介するとか聞いたことあるか？」

「無いね、確かに」

じゃあ。

「銀ね」

「銀？」

「うん。名前」

「何だそれ」

「なんかさ。フィルムを銀塩ってゆーらしいんだ。だから銀」

「黒猫なのに銀か。変なの」

「嫌？」

「そんな事無いよ。ありがとう」

「幽霊にお礼言われるってどーなんだろ」

「幽霊がお礼言うってどーなんだろうな」

笑った。

ファインダーを覗きながら笑った。

知らないヒトがこんな姿見たら怖いだろーな。

まぁいいけど。

私はファインダーを覗きながら色々話した。

色々試してもみた。

ファインダーから手を伸ばせば銀を触れるかとか。

結局は触れなかった。

カメラを通して見える私の手を銀は触れるのに。

私にはその感覚が無かった。
銀の起こす行動はカメラの中だけの事だった。
銀の声はファインダーを覗いている時。
ファインダーから銀が見える時しか聞こえなかった。

「あ！」

私はファインダーを覗いた。

「ねえ銀」
「何だ？」
「水道橋の写真撮ってないよ」
「逃げてきちゃったからか」
「うん。戻って撮らなきゃ」

水道橋に戻って写真を撮った。
銀もっと左とか。
動いちゃダメとか。
しゃべりながら。
傍から見たら変な人なんだろうな。
それでも。
何故か気にならなかった。
時間は過ぎ夕方になっていた。
まだ一つしかお寺さん見てないってどーなの。
ファインダーを覗きながら話をした。

「そろそろ夕飯食べなきゃ」
「そっか」
「やっぱり湯豆腐だよね」
「湯豆腐？」

「うん。ここは湯豆腐が有名らしいんだよ」
「へー」

お寺さんから程近い湯豆腐屋さんに私は行く事にした。
私は湯豆腐を注文。
高っ！
湯豆腐高い！
私の普段食べる七十八円の豆腐とは何が違うんだろ。
運ばれてくる湯豆腐。
湯豆腐にカメラを構えた。

「ねえねえ」
「あん？」
「銀ってやっぱり猫舌なのかな」
「猫だから猫舌だろ。あー、あの猫舌ってのは別物だよ」
「ん？」
「熱いのが苦手ってやつ」
「そうなの？」
「動物は熱い食べ物をあんまり食った事無いから苦手なだけだよ」
「そーなんだ」
「まあ、俺は幽霊だから大丈夫かもしれないけどな」
「じゃあさ、湯豆腐食べてみなよ」
「やだよ」
「いいじゃん。いいじゃん」
「じゃあ一口な」

銀は恐る恐る湯豆腐を舐めた。
予想通りの展開だった。

「あっちい！」

私は笑いを堪えるので必死だった。
暴れる銀。
その所為で前足を鍋に突っ込んでしまい更に暴れる。
ファインダーの外では何も起きて無いのに。
中では大暴れ。
面白くて面白くて。
私はシャッターを切った。
すっごい楽しい夕飯だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0025z/

秋空は澄んでいるのに

2011年12月5日20時09分発行